



尼崎探訪家・井上眞理子の

第三十九歩

東本町のチョコレート工場

麦チヨコと駄菓子屋



昭和33年に日本女子大学家政学部が駄菓子屋の調査をしている。その中に子どもたちが持つてくるお金の調査があって、10円が最も多く、次いで5円だそう。ちょうど私が足しげく駄菓子屋に通っていたころだから、私の小さい手にはしかりと、10円玉が握られていたはずだ。10円あれば、たいがい物は買えた。あんみつ姫の絵の付いた袋入りのチョコレート菓子は、いわゆる当て物で、当たりが出たら、大きな袋がもらえた。お菓子のほかに縄跳び紐、リリアン、凧なども売っていた。駄菓子屋はおじいさんおばあさんがやっていることが多く、のんびりした商売に見えるが、利が薄いため案外大変そう。冬は焼き芋、夏はかき氷をしている店もあった。今では町を歩いていても、駄菓子屋を見掛けることはほとんどなくなった。子どもたちがお菓子を求めてたむろするのは、コンビニばかりになったのだろうか。とさみしく思っていたら、昔駄菓子屋で売られていたお菓子が、今も健在だと聞いた。東本町にある高岡食品工業㈱を訪ねると、会長の高岡和子さんがお話ししてくださいました。

「麦チヨコ」は、和子さんの夫で先代社長の康博さん（故人）が今から40年ほど前に売り出した小袋入りのお菓子で、懐かしく思い出す人も多いだろう。当初は駄菓子屋で量り売りだったのが、袋入り

子どもたちの夢を追って

に変わった。子どもたちが気軽に買えるよう、量は少しずつ減らしているが、値段は今でも1袋30円。ほかにサッカードールチョコなど人気商品が多くある。康博さんが、チョコレート作りを始めたのは、昭和23年のことで、それまで家は小売りも兼ねた菓子問屋だった。チョコレートにこだわった訳を和子さんが教えてくださった。康博さんは子どものころからチョコレートが大好きだったが、当時はかなり高価だったので、遠足のときくらいしか食べることができなかった。戦争中は戦地でも、チョコレートのことを夢にまで見たそう。生きて帰ることができたら、日本の子どもたちにはいっぱい食べてもらおうと心に決めていた。工場は大物川緑地のほとりにおいて、そばを歩くとチョコレートの甘い香りがいっぱいだった。



昭和40年ごろの東本町（尼崎市立地域研究史料館所蔵写真）